

# 1 月例会 『ザ・テノール 真実の物語』

## 迎春

### 新年明けましておめでとうございます

昨年もいろいろなことのある年でした。自然災害や外国でのテロなどの災いが記憶に残ります。また、ひとりひとりのお話を聞くと、家族の新しい門出など、明るいお話が多かったようです。

加古川シネマクラブとしては、会員数の減少というこの会の存続にかかわる問題が解決しないまま、新年を迎えました。良質の映画は、少しの間ですが、知らない世界に連れて行ってくれ、感動と知識を与えてくれ、人生を豊かにしてくれるものです。会員の皆様には、映画鑑賞の楽しさを伝え、ひとりでも多くの仲間を増やしていただきますようお願いいたします。

本年も、昨年に引き続き、「共感もてる映画」「良質な映画」「心暖まる映画」を選び、「人との出会い」を大切に、一年頑張っていこうと思います。

本年もどうぞよろしくお願いたします。

### 例会のお知らせ

■名称／第82回例会 『ザ・テノール 真実の物語』

■日時／2016年1月21日(木) ①PM2:00～、  
②PM4:20～、③PM6:40～

■場所／加古川総合文化センター大会議室(JR 東加古川駅から北へ徒歩 10 分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北東へ 600m)

■受付／入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。入会手続きを行っていない方は、受付で 4 箇月分の会費(2000 円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお受取りください。

■タイトル／ザ・テノール 真実の物語

■監督・脚本／キム・サンマン

■出演／ユ・ジテ、伊勢谷友介、チャ・イェリョン、北乃きい、ナターシャ・タプスコビッチ、ティツイアーナ・ドウカーティ

■データ／2014 年、韓国、2 時間 1 分

■ジャンル／ヒューマンドラマ、音楽

■解説／ヨーロッパで活躍し、アジア史上最高のテノールと称されながら、甲状腺ガンに冒され一度は声を失いながらも、日本での手術と厳しいリハビリの末に再びステージに立ったオペラ歌手ペー・チェチョルの実話をもとにしたドラマ。

主人公ペー・チェチョルを演じるのは、異色の作品『オールドボーイ』で好演したユ・ジテ、そして、日本の音楽プロデューサー沢田を演じるのが多彩な活躍をしている伊勢谷友介。二人の熱演がすばらしい。

■ストーリー／ヨオペラ歌手、ペー・チェチョル(ユ・ジテ)の未来は輝いて

いた。彼は繊細で力強い類希な歌声(リリコ・スピント)を持ち、その歌声はオペラの本場ヨーロッパの観客を魅了して、「100年に一人の声を持つテノール」と絶賛された。舞台ではスポットライトを浴び、家では愛する妻のユニ(チャ・イェリョン)と一人息子に囲まれた幸福な日々。チェチョルは成功に酔いしれていた。そんななか、公演を終えたチェチョルに、沢田幸司(伊勢谷友介)と名乗る日本人の音楽プロデューサーが声をかけてきた。チェチョルの歌声に惚れ込んだ沢田は、ぜひ日本のオペラ公演で主演として出演して欲しいと熱心に頼み込む。韓国人のオペラ歌手を招聘することは大きな賭けだったが、フタをあけてみれば日本での公演は大成功。その打ち上げで、沢田のアシスタントの美咲(北乃きい)はギターを弾き語り、チェチョルに歌を捧げ、沢田は辛い生い立ちのなかで常に音楽に支えられてきたことを告白する。仕事の付き合いを越えて心が触れ合った夜。この日以来、チェチョルと沢田は固い絆で結ばれた。

意気揚々とヨーロッパに戻ったチェチョル。ところが、自分の次のシーズン公演の「オテロ」公演の練習中に、突然意識を失って倒れてしまう。医師がくださった診断は甲状腺癌。手術でなんとか命をとりとめたものの、その代償は大きかった。手術中、声帯の片方の神経が切れてしまい、彼は二度と歌う事ができなくなってしまったのだ。その事実を受け入れることができず、ただ呆然とするチェチョル。劇場から契約を切られ、なす術もなく韓国に帰国するしかない。絶望の淵に追いやられたチェチョルを、妻のユニと沢田は懸命に支えた。そして、チェチョルの声を取り戻せるかもしれない一人の日本人医師を見つける。しかし、医師も躊躇するような手術だけ



に、成功の確率は限りなく低い。それでもチェチョルは自分の声を、人生を取り戻すために運命の手術に挑んだ。果たして、彼は再び舞台に立つことができるのか……。

(作品ホームページから抜粋)

## 忘年会を開催しました

今年の忘年会は、12月13日(日)に加古川駅前のかごの屋加古川店で、明石シネマクラブの有志3人を含め計12人の参加で開催しました。料理を選びながらの食べ放題というお店のシステムから、注文に時間をとられ、例年と比べると、一年を振り返ったり、近況や映画のことを語り合う時間が少なかったのが残念でした。

したがって、今年も恒例の忘年会で選んだ映画10選が発表できません。残念です。

2016年は、より多くの人と映画談議ができる良い年であることを期待しています。

## 「妻への家路」観てきました

明石シネマクラブの12月例会の中国映画、『妻への家路』を観に行ってきました。監督がチャン・イーモウで、主演の記憶が弱まっている妻の役をコン・リーが演じる。これだけでも、「名作間違いなし」と期待をもって、評価のハードルを上げて観に行ったのです。こういうときは、「外れ」ということが多いのですが、やられました。

詳しくは言葉にできませんが、映像、期待と絶望、日常、家族、人間の記憶、幸福、美意識、いろいろな言葉が渦巻きながら、観終わった時には、「こんな作品を作ってしまうとは……」と感動以上に感心して会場を出ました。

わかりやすいハッピーエンドの映画が好きな私ですが、対照的なこの作品については大いにおススメです。

(映画の評価には、個人差があります。ご注意ください。)

(ハインリッヒ)

## 前回特別例会の報告

11月19日の例会は、加古川出身撮影監督の故姫田眞佐久さんの生誕100年目にかかる年の誕生日であることを記念して、代表作である『キューポラのある街』の上映会を開催しました。この作品は、没後30年を迎える相生市出身の浦山桐郎監督の代表作でもあります。

古い映画を嫌がる人もいますが、この作品はあらためてみると、現代と同じような社会問題が多く描かれ、主人公(吉永小百合)たちが向きあったり、どうしようもなくなったりと、とても濃い内容のものでした。若いころに観た時は、こんなこと全く考えずに観ていたものです。

また、故姫田眞佐久さんの目でもある、カメラの視点で見ると、こだわりのものや挑戦的な構図に気づき、楽しんで観ることができました。会場の人も、作品には

引き込まれており、全体的に高評価でした

また、伊良子序(いらこはじめ)さん(元神戸100年映画祭総合プロデューサー)の記念講演を合わせて行いました。

参加会員99人、明石シネマクラブからの参加者6人、一般入場者37人、合計142人と少なかったのが残念でした。

## 明石シネマクラブ例会情報

■名称/『パチカンで逢いましょう』

(2012年、ドイツ、105分)

■解説/夫に先立たれたドイツ人女性マルガレーテは、ローマ法王に面会するため単身パチカンへと向かう。彼女は敬虔なカトリック教徒だったが、法王に懺悔しなければならぬことがひとつだけあった。初めてローマを訪れたマルガレーテは、自分と同じく人生の秘密を抱える老詐欺師ロレンツォと出会う。やがて、ひよんなことから廃業寸前のドイツ料理店のシェフとなったマルガレーテは、美味しい料理で店を建て直すことに成功。その評判は法王のもとにも届き……。

■監督/トミー・ピガント

■出演/マリアンネ・ゼーゲブレヒト、ジャンカルロ・ジャンニーニ

■日時/2月18日(木) ①PM2:00-、②PM4:30-、③PM7:00-

■場所/アスピア明石9階子午線ホール(JR明石駅東徒歩5分)

■目的・内容/加古川シネマクラブと明石シネマクラブの交流事業として、映画鑑賞の機会を増やし新入会員を増やそうと、例会に相互参加できるようにしています。

■受付/会場受付で、①加古川シネマクラブの会員であることを証明するもの(氏名が記されている例会参加券が送られてきた封筒など)を提示し、②鑑賞希望であることを告げて、③受付簿にサインする

■明石シネマクラブ TEL 090-3860-6662

## ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200-300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL [cinemaclub@nifty.com](mailto:cinemaclub@nifty.com)

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数 143 人(11月19日現在)

